貝塚市埋蔵文化財調査報告 第24集

貝塚市遺跡群発掘調査概要XIV

1 9 9 2 ・ 3

貝塚市教育委員会

はじめに

貝塚市は大阪府南部に位置し、北は大阪湾、南は和泉葛城山の山並みに接した自然環境に恵まれた地域であります。歴史的にも古い伝統をもち、泉州地域におきましても重要な発展を遂げてきたところで、市内には多数の歴史的遺産が散在し、地下に埋もれる埋蔵文化財につきましても多数の存在が知られています。

これらは貴重な歴史的資料であり、保護保存して次の時代に伝えることは現在に生きるわたしたちに与えられた義務でもあります。

しかしながら、近年本格化した開発事業はこれら文化財を破壊の危機にさらしているのも事実であり、本市にとっても開発と文化財保護との調和が大きな課題となっています。

今回の調査もこうした開発行為に伴う事前調査でありますが、幾多の成果を得ることができましたので、ここに平成３年度中に実施いたしました埋蔵文化財緊急発掘調査結果の一部を報告いたします。本書が今後の文化財の保護保存に活用され、また、考古学研究の一資料として役立てば幸いかと存じます。

なお、調査に当たり地元のかたがたをはじめ関係各位には多大なご協力、ご理解をいただき厚く感謝の意を表す次第であります。

平成４年３月

貝塚市教育委員会
教育長　岡　根　和　雄

例　　言

1. 本書は貝塚市教育委員会が平成３年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における緊急発掘調査結果のうち、沢城跡、土生遺跡の発掘調査にかかる結果の概要報告である。

　なお、平成２年度実施分についても、整理の都合から一部を本書に合わせて掲載した。

2. 発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課学芸員前川浩一、三浦　基、上野裕子が担当し、平成３年４月16日より調査を実施し、翌４年３月31日に終了した。

　また、現地調査および本書作成にかかる諸作業については下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

清水　久子　　辻　　栄子　　田渕　広巳

川崎　陽子　　森村　紀代　　田代　自子

3. 遺物写真撮影は三浦が行った。

4. 本書の編集は前川が行い、執筆は三浦が行った。

5. 出土遺物、調査記録は貝塚市教育委員会において保管している。広く利用されることを希望する。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次

Ⅰ　沢城跡の調査

1.　位置と環境……1

2.　調査の概要……2

3.　検出遺構……2

4.　出土遺物……7

5.　まとめ……8

Ⅱ　土生遺跡の調査

1.　位置と環境……9

2.　調査の概要……10

3.　検出遺構……11

4.　出土遺物……11

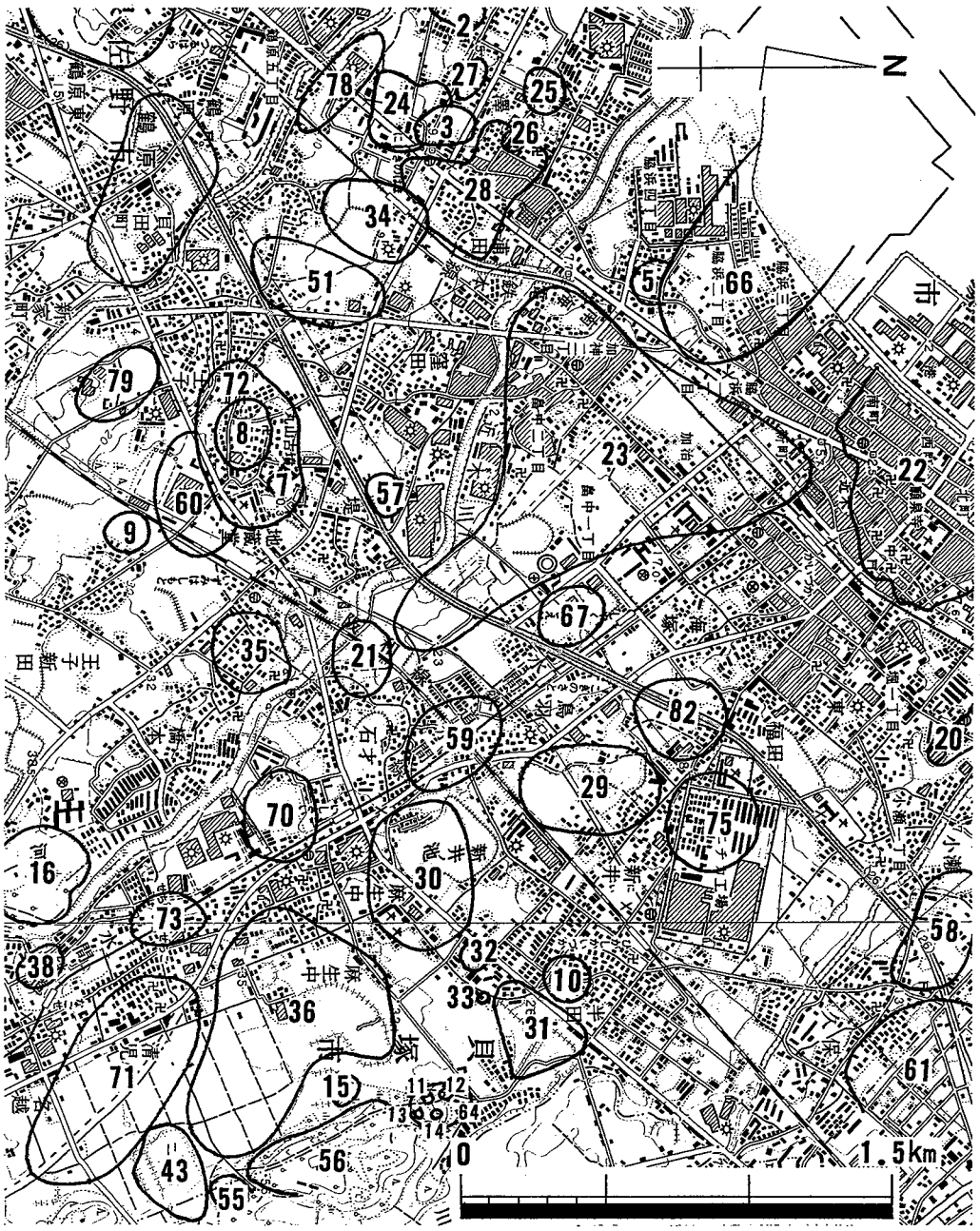
5.　まとめ……18

図版目次

図版1　沢 城 跡
1. 調査区全景
2. 同　　上
図版2　沢 城 跡
1. ＳＢ－１全景
2. 同　　上
図版3　沢 城 跡
1. ＳＤ－１
2. 同　　上
図版4　沢 城 跡
1. ＳＤ－２
2. 同　　上
図版5　沢 城 跡
ＳＤ－１(12)、ＳＤ－５(13)
第３層(８、11、15)出土遺物
図版6　土 生 遺 跡
1. 調査区全景
2. 土層断面
図版7　土 生 遺 跡
1. 土層断面
2. 溝土層断面
図版8　土 生 遺 跡
第３層(５,８,11,17,18,31,35,36)
出土遺物
図版9　土 生 遺 跡
第３層(１,２,24,25,26,27,32,38) 出土遺物

挿図目次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　沢城跡調査位置図
図３　調査地概略図
図４　遺構配置図
図５　ＳＤ－１(12) ＳＤ－５(13)
ＳＸ－１(３)
第３層(１～２,４～11,14～15)
出土遺物
図６　土生遺跡調査位置図
図７　調査地概略図
図８　第３層出土遺物
図９　第３層出土遺物
図10　第３層出土遺物
図11　第３層出土遺物
図12　第３層出土遺物



2. 沢海岸遺跡 3. 沢遺跡 5. 長楽寺跡 7. 丸山古墳 8. 地蔵堂廃寺 9. 下新出遺跡 10. 秦廃寺 11. 海岸寺山須恵器窯跡 12. 海岸寺山墳墓遺跡 13. 海岸寺山南須恵器窯跡 14. 海岸寺山古墳 15. 麻生中新池遺跡 16. 河池遺跡 19. 泉州麻生塩壷出土地 20. 堀遺跡 21. 橋本遺跡 22. 貝塚寺内町遺跡 23. 加治神前畠中遺跡 24. 明楽寺跡 25. 沢共同墓地遺跡 26. 沢西出遺跡 27. 沢海岸北遺跡 28. 沢城跡 29. 新井鳥羽遺跡 30. 新井ノ池遺跡 31. 半田遺跡 32. 麻生中遺跡 33. 熊野街道一里塚 34. 澱池遺跡 35. 積善寺城跡 36. 清児遺跡 38. 高井天神廃寺高井城跡 43. 二ツ池遺跡 51. 窪田遺跡 55. 槍ケ谷城跡 56. 半田遺跡 57. 堤遺跡 58. 小瀬五所山遺跡 59 石才遺跡 60. 王子遺跡 61. 土生遺跡 64. 海岸寺山遺跡 66. 脇浜遺跡 67. 今池遺跡 70. 石才南遺跡 71. 名越遺跡 72. 地蔵堂遺跡 73. 名越西遺跡 75. 新井鳥羽北遺跡 78. 沢西遺跡 79. 王子西遺跡 82. 福田遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

Ⅰ　沢城跡の調査

1.　位置と環境（図２）

調査を実施したのは貝塚市北西部に位置する沢城跡の一角である。

沢城跡は、貝塚市をほぼ縦断する近木川と泉佐野市との境をなす、見出川とに挟まれた海抜約８～11ｍの地点に位置し、南海本線二色ノ浜駅のすぐ西側、府道堺阪南線を挟んで、東西約 400 ｍ、南北約 350 ｍの範囲に広がる中世の城跡である。

周辺の遺跡は、弥生時代から中世にかけての集落跡である沢遺跡、中世の集落跡である沢西遺跡、奈良時代以降の集落跡である澱池遺跡や平安時代の寺院跡と推定される明楽寺跡等が近接して存在している。

今回の調査は遺跡マークの南端で府道堺阪南線に接する標高10ｍを測る地点沢 579－1番地である。

図２　沢城跡調査位置図

2. 調査の概要（図３）

開発計画に基づき 1.7 m×8mの規模の調査区を１カ所設定し、試掘調査を実施した。試掘の結果、溝、柱穴等の遺構を検出したため、改めて本格的調査を実施したものである。

本調査は、東西13m、南北21m、面積約 270 ㎡の調査区を設定した。

調査地区の基本層序は約10～20cmの耕作土、約10cm程度の床土、約20cmの厚さで淡黄灰色土の遺物包含層（第３層）が存在し、その下は遺構が検出される地山（黄色粘土）である。地山は、海側（西側）に向かってゆるやかに低くなっている。

調査の結果地山面上にて調査区全域で溝、柱穴等の遺構を検出した。また、包含層より瓦器、土師器等の遺物も出土している。

3. 検出遺構（図４，図版１～４）

調査区全域において遺構を検出した。以下概略を示す。

溝　ＳＤ－１

本遺構は、調査区北部にて検出した溝である。中央部から北西に向かって走り、幅 0.2 ～ 0.3 ｍを測る。遺物は、須恵器、土師器、瓦器片が出土している。

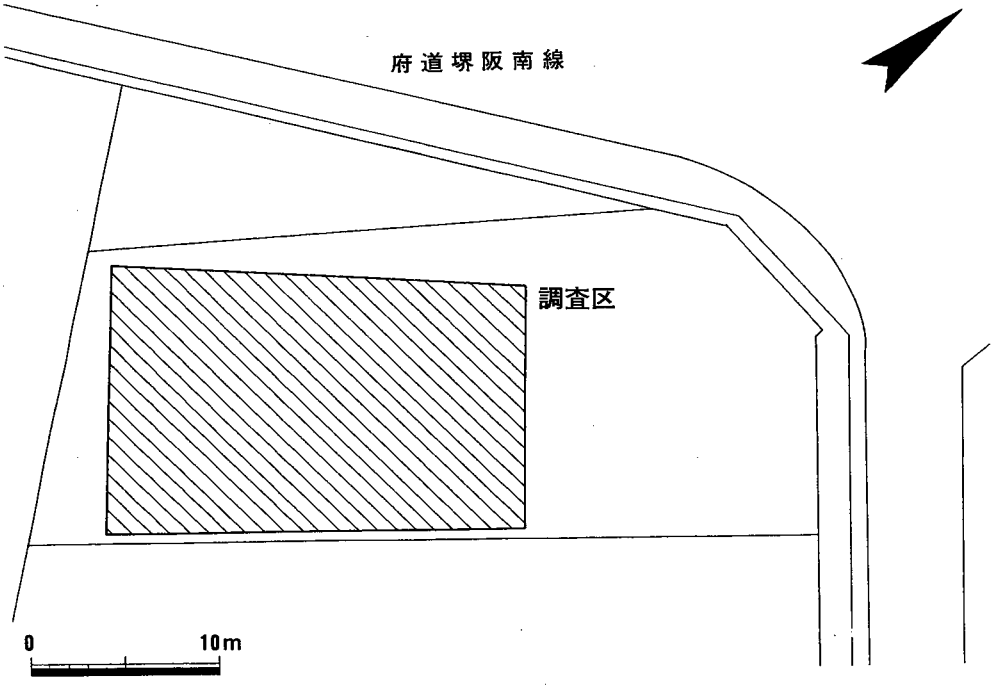


図３　調査地概略図

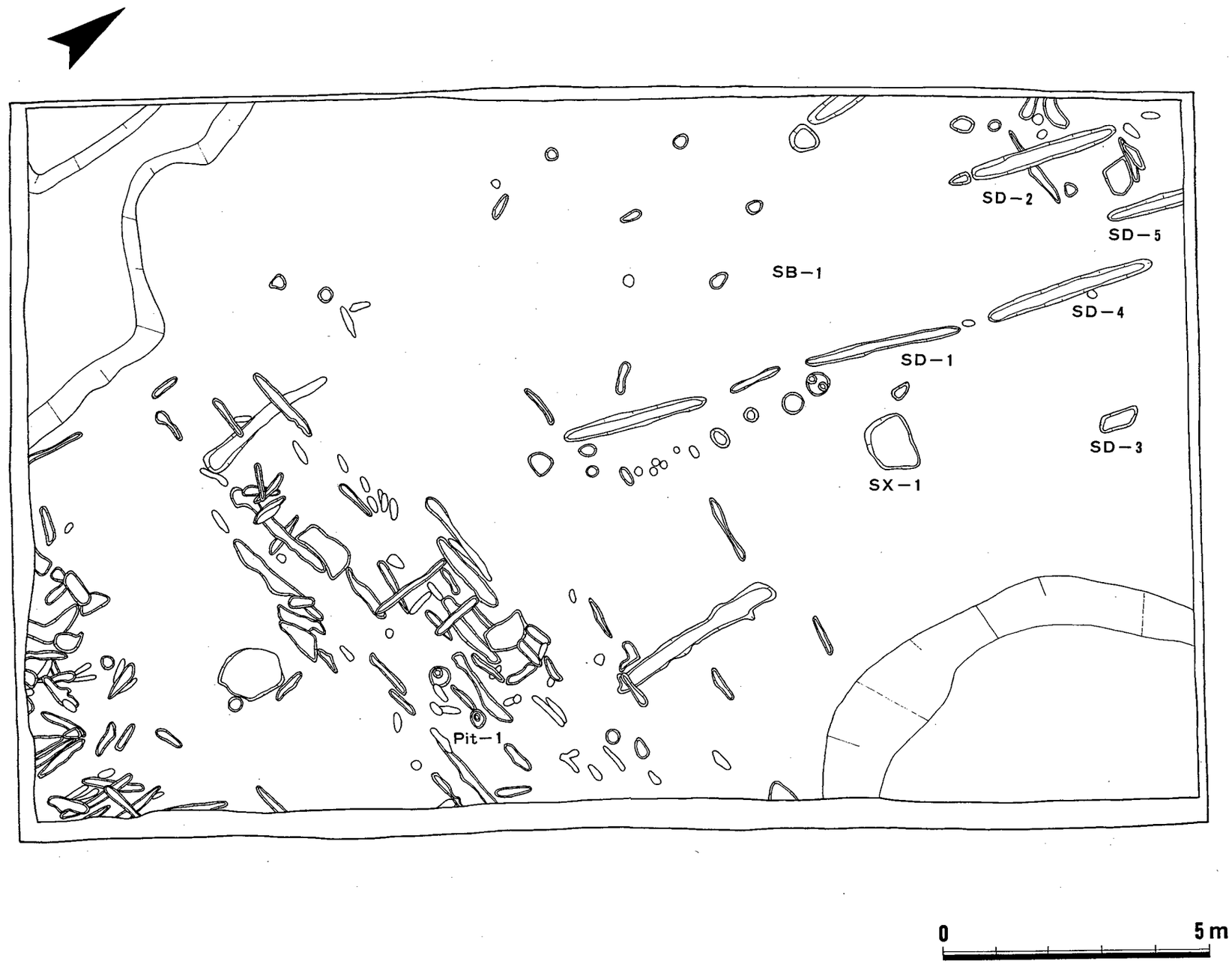


図4　遺構配置図

溝　ＳＤ－２

本遺構は、調査区北西部隅にて検出した溝である。北西に向かって走り、幅 0.5 ｍを測る。遺物は、瓦器片が出土している。

溝　ＳＤ－３

本遺構は、調査区北部中央部にて検出した溝である。北西に向かって走り、長さ約 0.6 ｍ幅約 0.2 ｍを測る。遺物は、瓦器片が出土している。

溝　ＳＤ－４

本遺構は、調査区北部中央部にて検出した溝である。ＳＤ－１に切られており全体の規模は不明であるが、検出長約２ｍ、幅約 0.2ｍを測る。遺物は瓦器片が出土している。

溝　ＳＤ－５

北西部隅にて検出した溝である。北西に向かって走り、長さ 1.4 ｍ、幅 0.25 ｍを測る。遺物は、瓦器片が出土している。

掘立柱建物　ＳＢ－１

本遺構は、調査区中央部西端にて検出した掘立柱建物である。建物が調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、梁行２間（２ｍ）、桁行２間以上である。掘方は平面形がほぼ円形を呈し、直径 0.3 ～ 0.4 ｍを測る。

性格不明遺構　ＳＸ－１

本遺構は、調査区北部にて検出した性格不明遺構である。長軸 1.1 ｍ、短軸 0.7 ｍを測る。遺物は、瓦器、土師器片が出土している。

性格不明遺構　ＳＸ－２

本遺構は、調査区北部にて検出した性格不明遺構である。長軸 1.0 ｍ、短軸 0.5 ｍを測る。遺物は、瓦器、土師器片が出土している。

柱穴　Ｐｉｔ－１

本遺構は、調査区中央部東側にて検出した柱穴である。掘方は平面形が円形を呈し埋土灰色土で直径 0.4 ｍ、柱当は埋土黄色粘土混じりの灰色で直径 0.2 ｍを測る。遺物は、土師器片が出土している。なお、この柱穴に対応する柱穴は、西南方向に同規模のものが存在するが他に対応するものが認められず建物跡とは考えにくい。

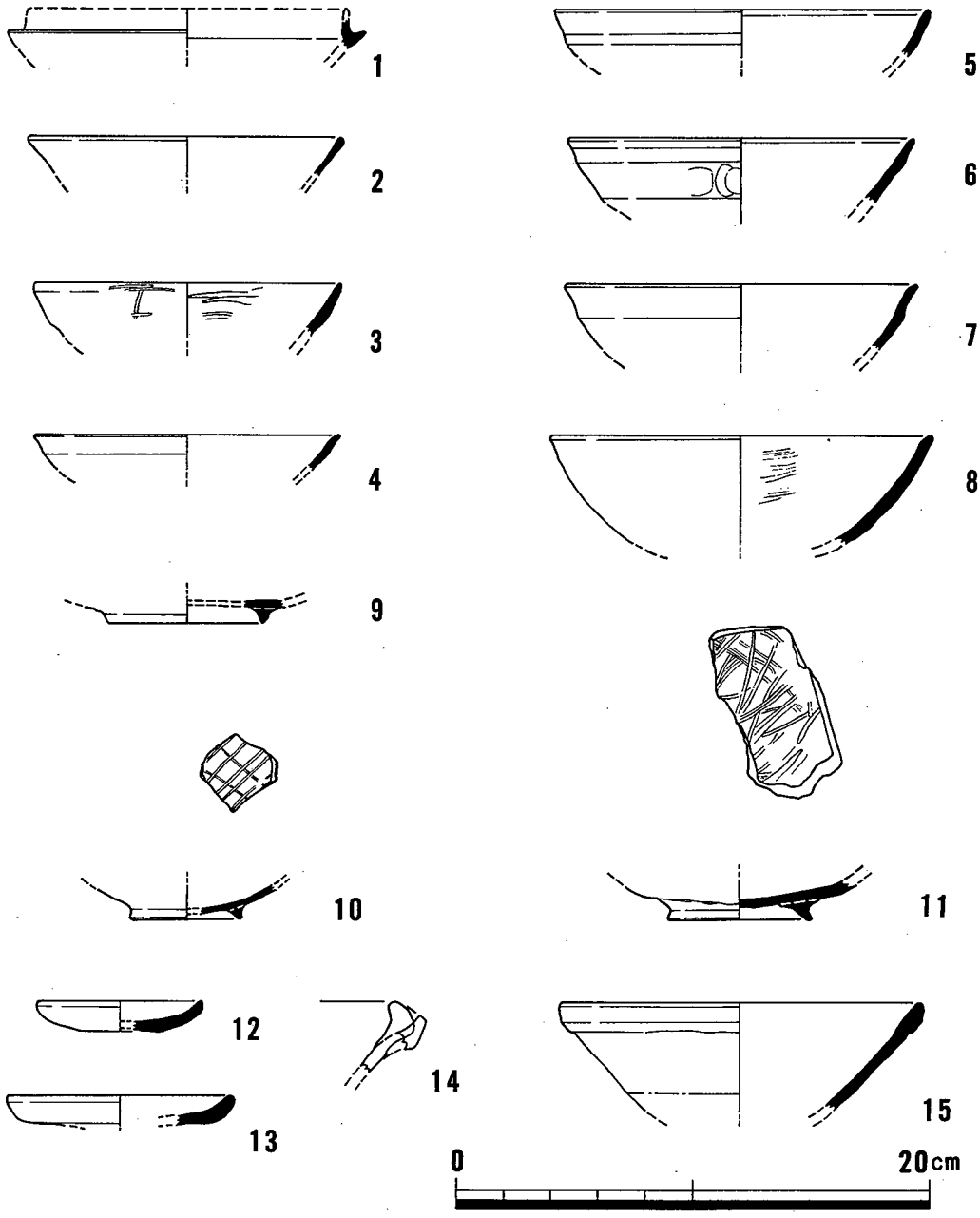


図5　SD－1(12)、SD－5(13)、SX－1(3)、第3層(1～2、4～11、14～15)出土遺物

4. 出土遺物（図５，図版５）

調査区のほぼ全域から遺物の出土を見たが、包含層からの出土がほとんどであり、遺構から出土したものは少量であった。以下出土遺物の中から実測に耐えるものについて概要を示す。

溝　ＳＤ－１

12は復元口径 7.8 cm、器高 1.3 cmを測る土師器小皿である。端部は横方向のナデで整えている。

溝　ＳＤ－５

13は復元口径 9.2 cm、器高 1.3 cmを測る土師器小皿である。端部は横方向のナデで整えている。

性格不明遺構　ＳＸ－１

３は、復元口径 12.8 cmを測る。内面にミガキを施すほか、外面端部付近にもミガキを施す。

第３層（包含層）出土遺物

１は、復元口径 13.4 cmを測る須恵器杯身である。口縁部端部は欠失しているが受部ともに回転ナデにより仕上げている。

２・４～８は瓦器椀口縁部片である。２は、復元口径13.4 cmを測る。口縁部は外方に真っすぐにのび端部は丸く収まる。４は、復元口径 12.6 cmを測る口縁部片で端部に横ナデを施す。５は、復元口径 15.6 cmを測る。６は、復元口径 14.6 cm を測る。端部に横ナデを施すほか、体部に指頭痕が残る。７は、復元口径 14.8cmを測る。端部に横ナデを施し端部はやや外反する。８は復元口径 15.8 cmを測る。

９～11は瓦器椀底部片である。９は、復元高台径 6.2 cmを測る。高台ははりつけで断面三角形を呈する。10は、復元高台径 4.4 cmを測る。高台ははりつけで断面は三角形を呈する。内面には格子目と思われるミガキを施す。11は、復元高台径 5.6 cmを測る。高台は、はりつけでやや外方にのび端部は丸い。内面にはミガキを施す。

14は、須恵器こね鉢端部である。小片のため口径等は不明であるが、片口部であると考えられる。

15は復元口径 7.4 cmを測る口縁部から体部にかけての白磁碗片である。内外面ともに釉薬を施している。体部は外方に向かって真っすぐに立ち上がり口縁部は玉縁状を呈している。

5. まとめ

調査区全域にわたって遺構が検出され、一応の成果が得られたといえる。

検出遺構の中で建物跡が１棟検出されているが、遺物も出土しておらず、時期の決定は困難である。また、調査区北部、南部の隅にて検出した溝状の遺構があるが、調査区外に広がるため、また遺物も出土しておらずその性格は不明である。つまり、検出遺構のほとんどは、耕作に伴うものと考えられる。また、調査地が耕作されはじめた時期についてであるが、出土遺物等から考えると中世以降には耕作が行われていたと思われる。残念ながら城跡と関連するような遺構は確認されなかったが、中世において開発が進み耕作地が拡大された事を物語るのだろうか。この地の耕作にかかわった人々の生活の場については、その集落等が明らかになっておらず不明の点が多いといえる。

本調査の結果、調査地点が本遺跡の南端に位置することから、本遺跡の範囲が広がることが確認されるに至った。周辺遺跡においても、その調査回数が増加し数々の成果をあげている。今後、さらに周辺の遺跡とともにその状況を明らかにしていきたい。

II　土生遺跡の調査

1.　位置と環境（図６）

調査を実施したのは貝塚市北部に位置する土生遺跡の一角である。

土生遺跡は、貝塚市の北部を流れる津田川の北岸標高約15ｍを測る中位段丘上に位置する弥生時代から古墳時代にかけての集落跡である。遺跡の中心は岸和田市側に広がると考えられ本市においての遺跡の範囲は東西約 400 ｍ、南北約 100 ｍの範囲がマークされている。

周辺に散在する遺跡としては、西に中世の集落跡である小瀬御所山遺跡、南には中世の集落跡である新井鳥羽北遺跡、古墳時代から室町時代にかけての集落跡である堀遺跡等が存在する。

今回の調査地は遺跡マークの中央部にあたる標高15ｍを測る地点、久保 179 －１他地内である。

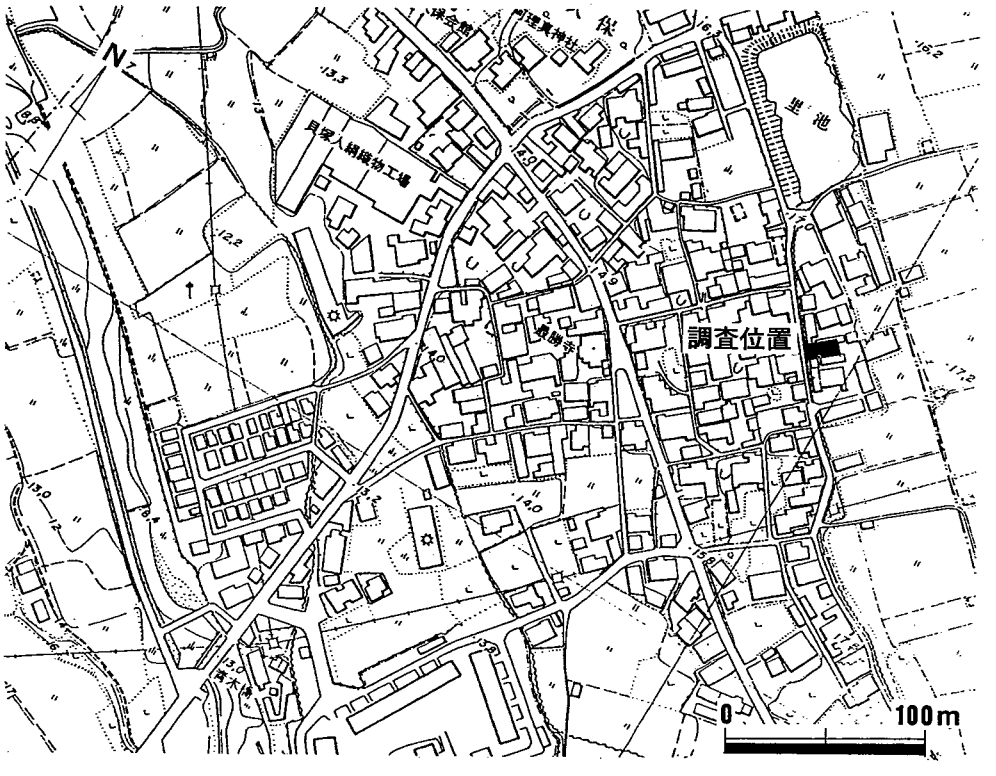


図６　土生遺跡調査位置図

2. 調査の概要（図７）

開発計画に基づき、東西約６ｍ、南北約10ｍ、面積約60㎡の調査区を設定した。調査地内における基本層序は、盛土（約10cm）、床土（約20cm）の下に層厚約20cmを測る淡黄灰色土、層厚約40cmを測る灰褐色系の層が堆積し、その下に地山となる淡黄灰色粘土を検出した。また、床土下に堆積する層は包含層（第３層）であり、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、陶器、磁器等の遺物の出土を見た。

調査地における地形変化はゆるやかに西に向かって低くなっているほか、北に向かって

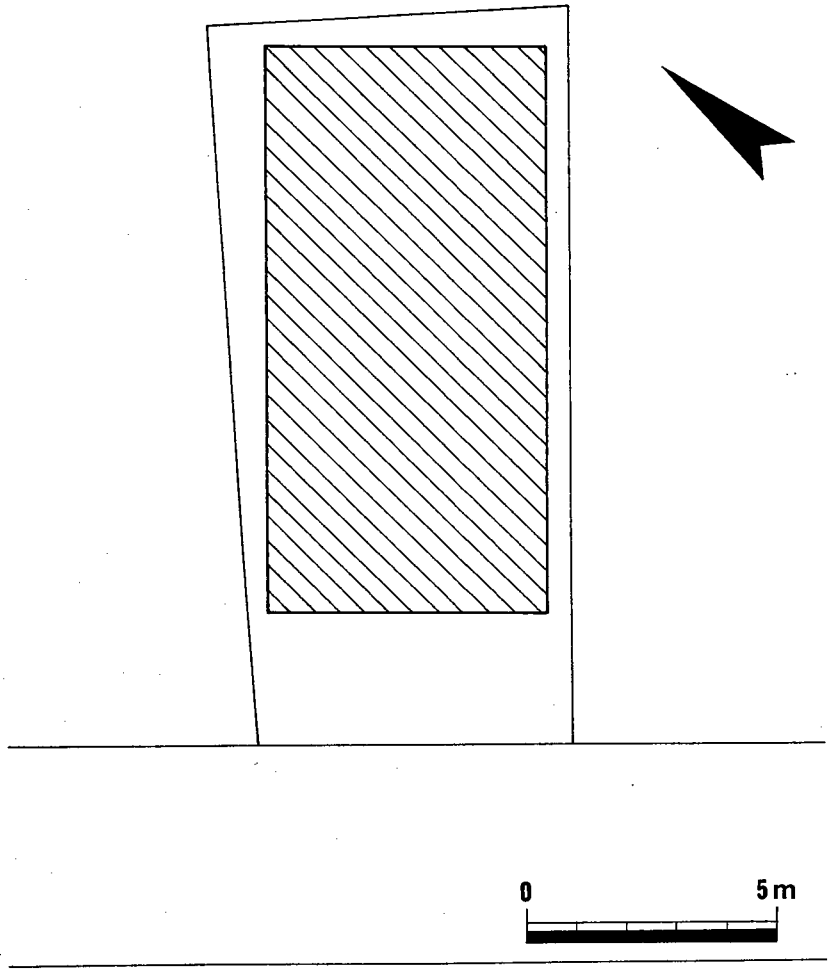


図７　調査地概略図

落ち込みを見せ溝と考えられる遺構がある。その溝から多くの弥生土器等の弥生時代の遺物が出土している。

3. 検出遺構（図版6，7）

本調査区にて検出した遺構は、調査区北部の溝1条である。土層断面の観察によりこの溝の状況について触れたい。

この溝は、東西方向に走ると考えられる。溝の規模は、幅約2m深さ約0.8mを測る。溝の堆積状況は、上層に暗褐色系の土が堆積し、その下に比較的粒のそろった暗灰色の砂が堆積しており湧水が激しい。この層より多くの弥生土器、石器等が出土している。

4. 出土遺物（図8～12，図版8，9）

本調査では弥生時代、古墳時代、中世の土器が出土している。量的には弥生時代の土器が最も多くそのほとんどを占める。その他に、石器片、石包丁等が出土している。

以下、主な概要を示す。

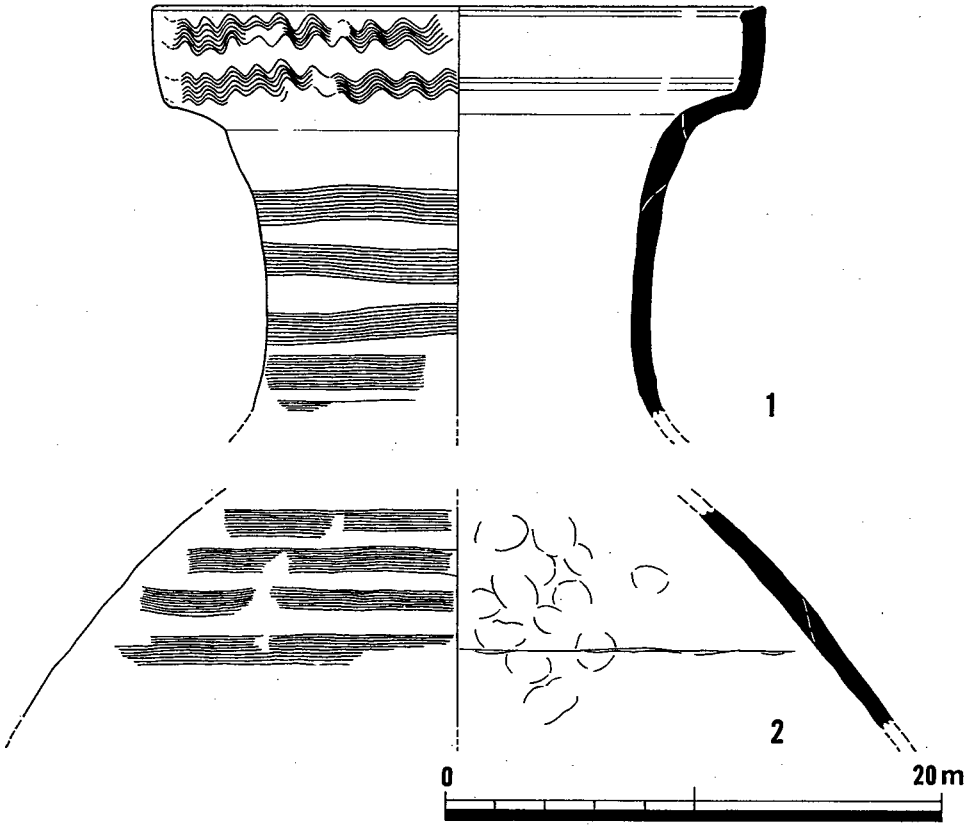


図8　第3層出土遺物

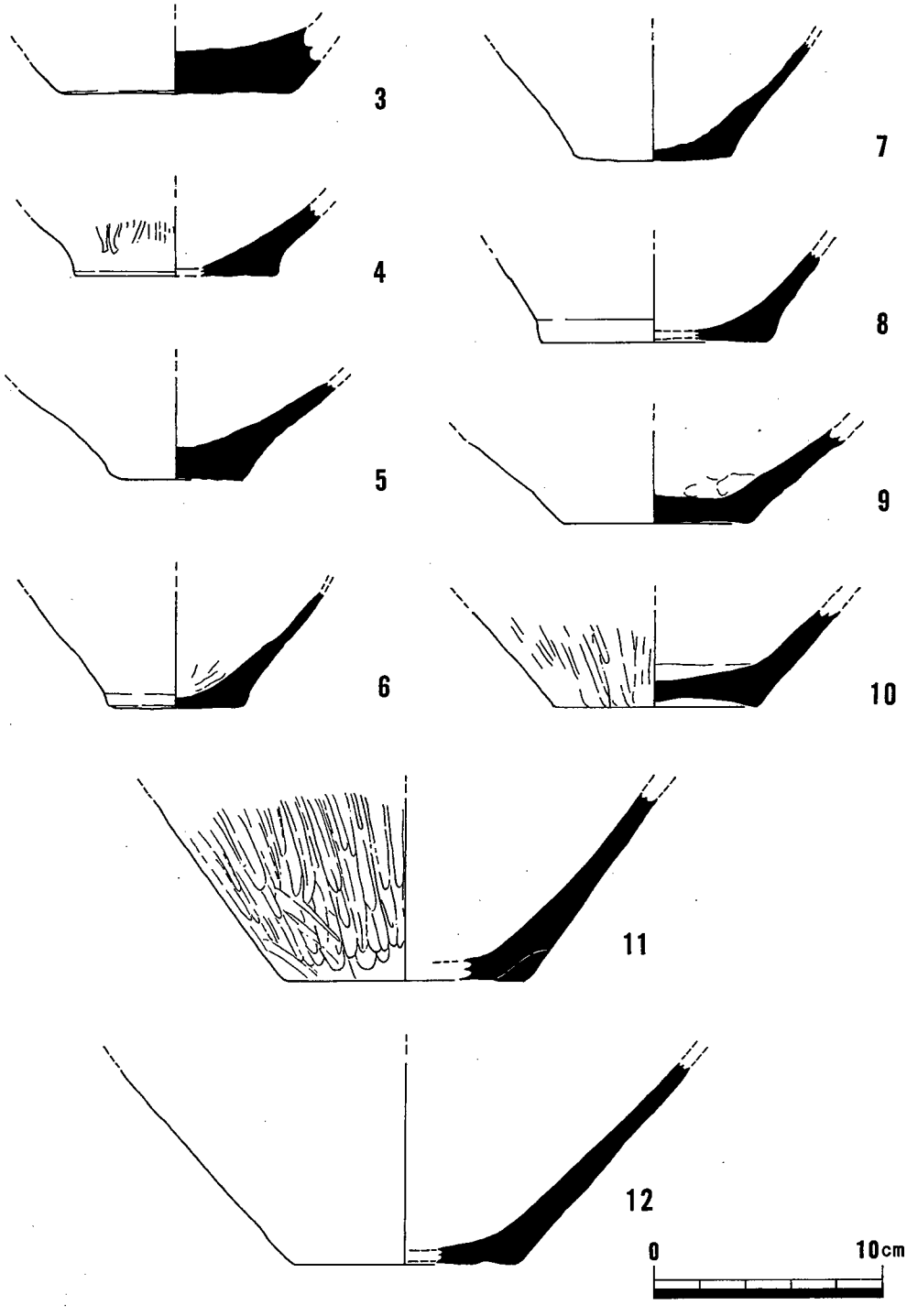


図 9　第 3 層出土遺物

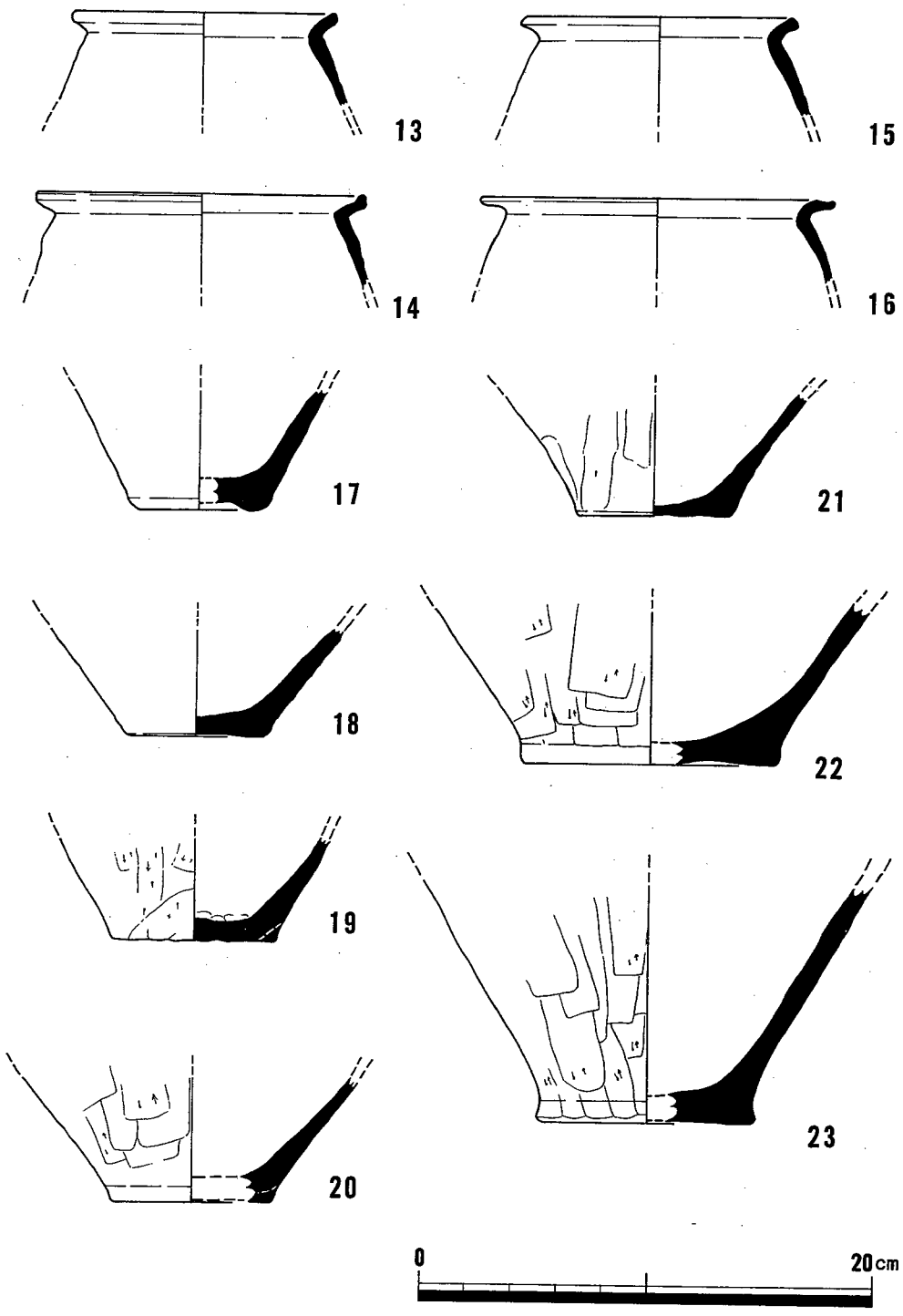


図10　第3層出土遺物

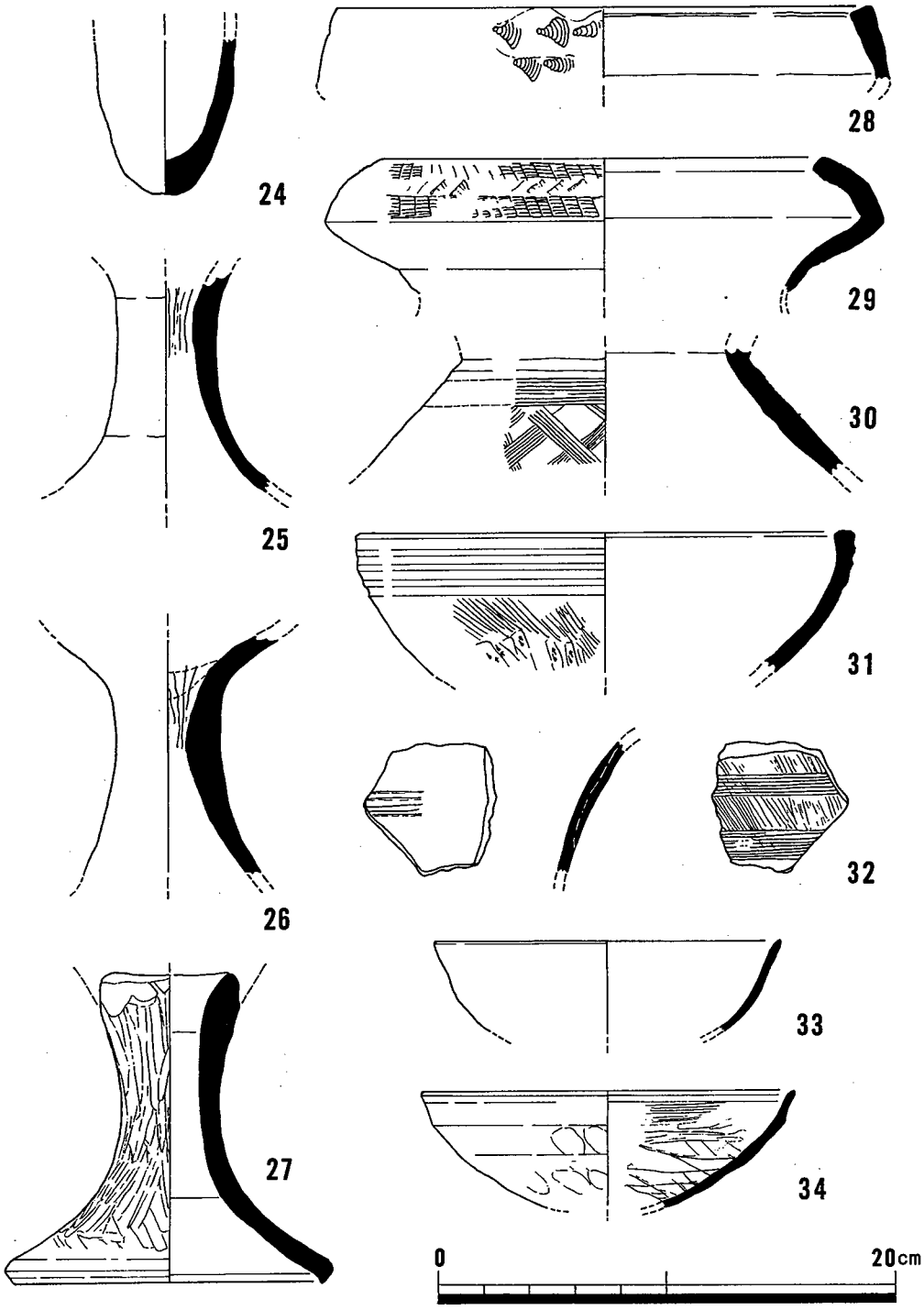


図11　第3層出土遺物

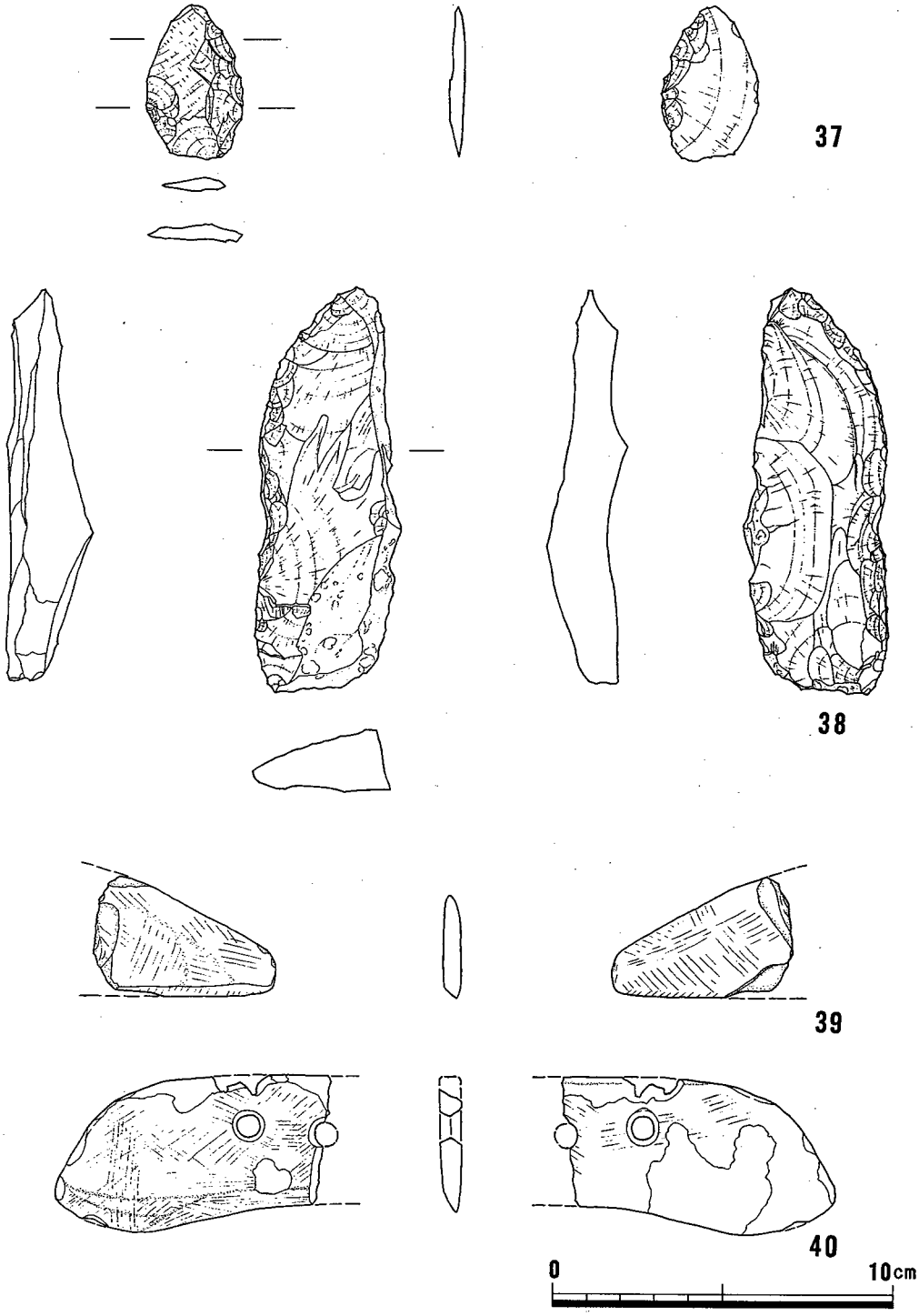


図12　第3層出土遺物

弥生土器

1は、復元口径約24.6cmを測る広口壷形土器口頸部片である。外開きの頸部から曲折してやや内湾しつつ立ち上る口縁部をもつ。また、拡張口縁部下頸部に接合痕を有する。調整は、口縁部付近はヨコナデを行い口縁拡張部に波状紋、頸部はハケ目調整後ナデ調整を行い櫛描直線紋を施す。

2は、壷形土器体部片である。接合痕を有する。調整は、内面指頭痕を有する。外面は不定方向のナデを行い櫛描直線紋を施す。なお、1と同一固体の可能性も考えられる。

3～12は、壷形土器底部片である。3は、復元底部径約10cmを測る。調整は内外面ともに不定方向のナデを施す。4は、復元底部径約8.8cmを測る。底部器壁は薄い。調整は内面ナデ、外面にミガキを施す。5は、復元底部径約5.8cmを測る。調整は内外面ともにナデを施す。6は、復元底部径約6.0cmを測る。器壁は薄く体部に向かって斜め上方に真っすぐたちあがる。調整は、剥離、摩滅のため不明である。　7は、復元底部径約7.0cmを測る。8は、復元底部径約10.0cmを測る。調整は不明である。9は、復元底部径約8.0cmを測る。調整は内外面ともに不定方向のナデを施す。10は、復元底部径約8.8cmを測る。調整は外面に縦位ミガキを施す。11は、復元底部径約10.4cmを測る。調整は外面に縦位ミガキを施す。12は、復元底部径約9.8cmを測る。調整は摩滅のため不明である。

13～16は、甕形土器口頸部片である。13は、復元口径約11.4cmを測る。頸部は、くの字に曲折する。調整は、内外面ともにナデを施す。14は、復元口径約14.0cmを測る。頸部は、くの字に曲折する。調整は、内外面ともにナデを施す。15は、復元口径約11.6cmを測る。頸部は、くの字に曲折する。調整は、内外面ともにナデを施す。16は、復元口径約11.6cmを測る。頸部は、丸みをもち曲折し口縁部は端部でつまみあげる。調整は、内外面ともにナデを施す。

17～23は甕形土器底部片である。17は、復元底部径約5.6cmを測る。調整は、内外面ともにナデを施す。18は、復元底部径約6.0cmを測る。調整は、内外面ともにナデを施す。19は、復元底部径約7.2cmを測る。調整は、内面にナデ、外面に縦位ケズリを施す。20は、復元底部径約7.0cmを測る。調整は、内面にナデ、外面に縦位ケズリを施す。21は、復元底部約6.8cmを測る。調整は、内面にナデ、外面に縦位ケズリを施す。22は、復元底部径約11.2cmを測る。調整は、内面にナデ、外面に縦位ケズリを施す。23は、復元底部径約9.6cmを測る。調整は、内面にナデを施す外面に縦位ケズリを施す。

24は、飯蛸壷形土器片である。口縁部欠損のため、口径不明。

25〜27は高杯形土器である。25は脚部片である。調整は、内面ナデ上部に絞り目、外面にナデを施す。26は脚部片である。調整は内面ナデ、上部に絞り目、外面にナデを施す。27は、底部径約13.0 cmを測る脚部から底部にかけての破片である。調整は内面ナデ、外面に縦位ミガキを施す。

28〜30は広口形土器である。28は復元口径約21.6 cmを測る口縁部片である。調整は、内外面ナデで、外面に扇状紋を施す。29は復元口径約19.0 cmを測る口頸部片である。頸部から広がり曲折し内湾しながらたちあがる。調整は、内外面ナデで、拡張口縁部外面に簾状紋を施す。30は頸部から体部にかけての破片である。調整は、内面にナデ、外面に櫛描直線紋、斜格子紋を施す。

31は台付高杯形土器口縁部片である。調整は、内面はナデ、外面は斜め方向のハケメ、縦位ケズリを施す。また、口縁部凹線紋を施す。

32は壷形土器体部片である。調整は、内面横位ハケメ、外面斜め方向のハケメの後、櫛描直線紋を施す。なおこの土器は、その焦げ茶色の胎土から生駒西麓産の土器と考えられる。

33・34は瓦器である。33は復元口径約15.0 cmを測る口縁部片である。内外面ともに摩滅が激しく調整は不明である。34は復元口径約16.4 cmを測る口縁部から底部にかけての破片である。調整は、内面をミガキ、端部をヨコナデを施す。外面に指頭痕を有する。

石　器

37・38は石器片である。37は長さ11.7 cm、幅3.8 cm、厚さ1.6 cmを測る石器剥離片である。石材はサヌカイトである。形は縦長で、一部に自然面が残る。剥離面は縦方向のもので比較的大きい。若干の交互剥離が施されるがそれ以上の加工は行っていない。

38は長さ4.5 cm、幅2.7 cm、厚さ0.4 cmを測る石器剥離片である。石材はサヌカイトである。形は、木葉状を呈する。

39・40は、石包丁である。39は残存長5.2 cm、幅3.4 cm、厚さ0.6 cmを測る。わずかに刃部先端部分の破片である。刃部は片刃である。緑色片岩製。40は、現存長7.7 cm、幅3.9 cm、厚さ0.6 cmを測る。約半分が欠失している。刃部は、内彎刃形態を呈し、片刃である。紐孔は2個残存する。緑色片岩製。

5. まとめ

今回の調査では、弥生時代の溝を検出することができた。調査区の関係で検出遺構の広がりや性格について明確にすることはできなかったが、一応の成果は得られたものと思われる。

出土遺物は圧倒的に弥生土器が多く、その時期もⅢ様式からⅣ様式の弥生中期に位置付けられる土器のみで占められており、石包丁等の石器も出土している。このことから周辺に集落の存在が想起されるに十分な要素をもつと考えられる。

遺構は溝一条を検出したのみにとどまったが、溝内の出土遺物の状態を考えるとその多くが、底部、口縁部等の破片である。 石器についても剝片、 破片であり同様のことが言える。また、本調査区周辺においても、ほぼ同時期とみられる溝が検出されておりこの遺構との関係も注目される。

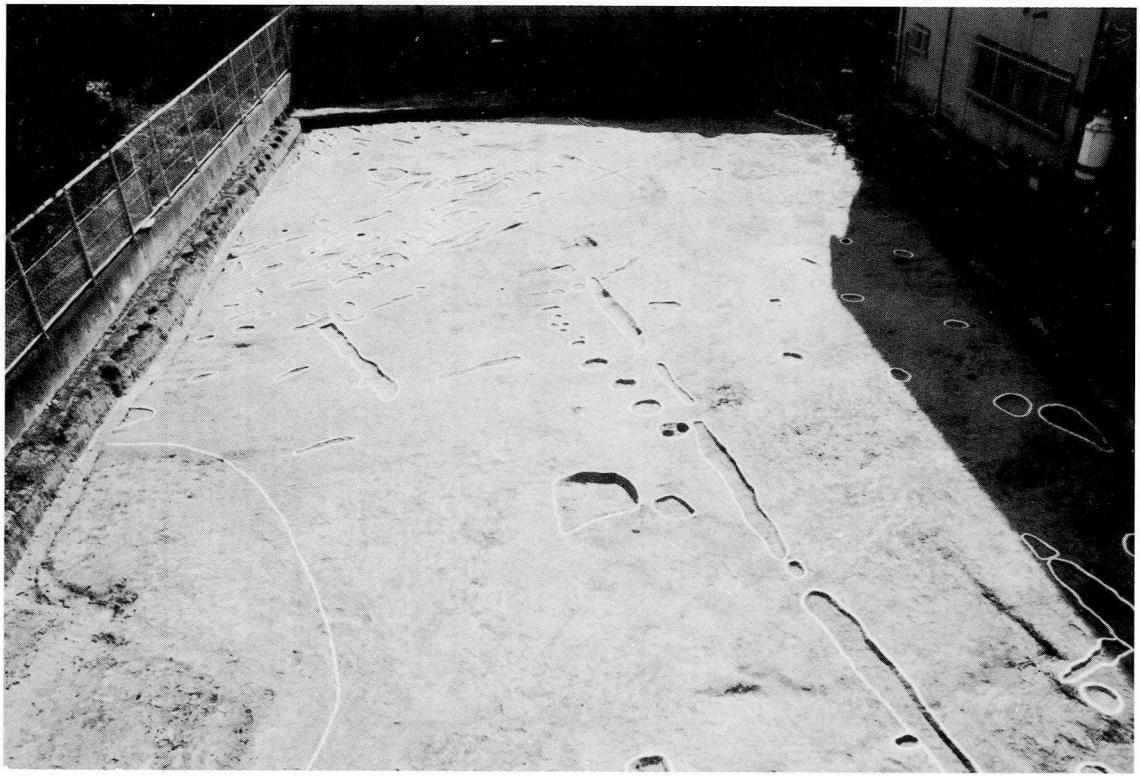
市内の海岸部付近において弥生土器が、このような形で出土した例はなく、市内の弥生時代の遺跡を考えるうえで重要である。また、本遺跡の中心は岸和田市側にあると考えられるためその成果も考え合わせ検討して行く必要がある。

このような資料が増加することによって本遺跡においての弥生時代の遺構の広がりや地形変化を知ることができると考えられ、周辺部遺跡とともに調査の進むことを期待するものである。

図　　版

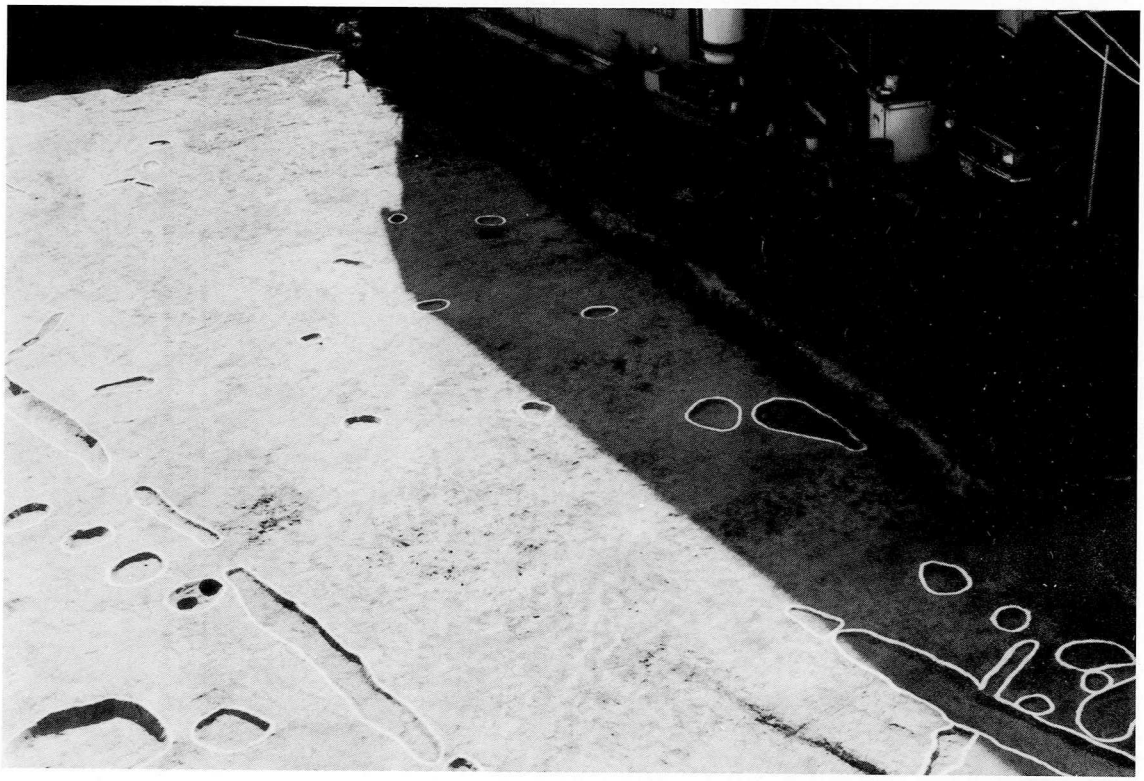
図版1　沢城跡

1．調査区全景　　北東より



2．同　上　　北東より

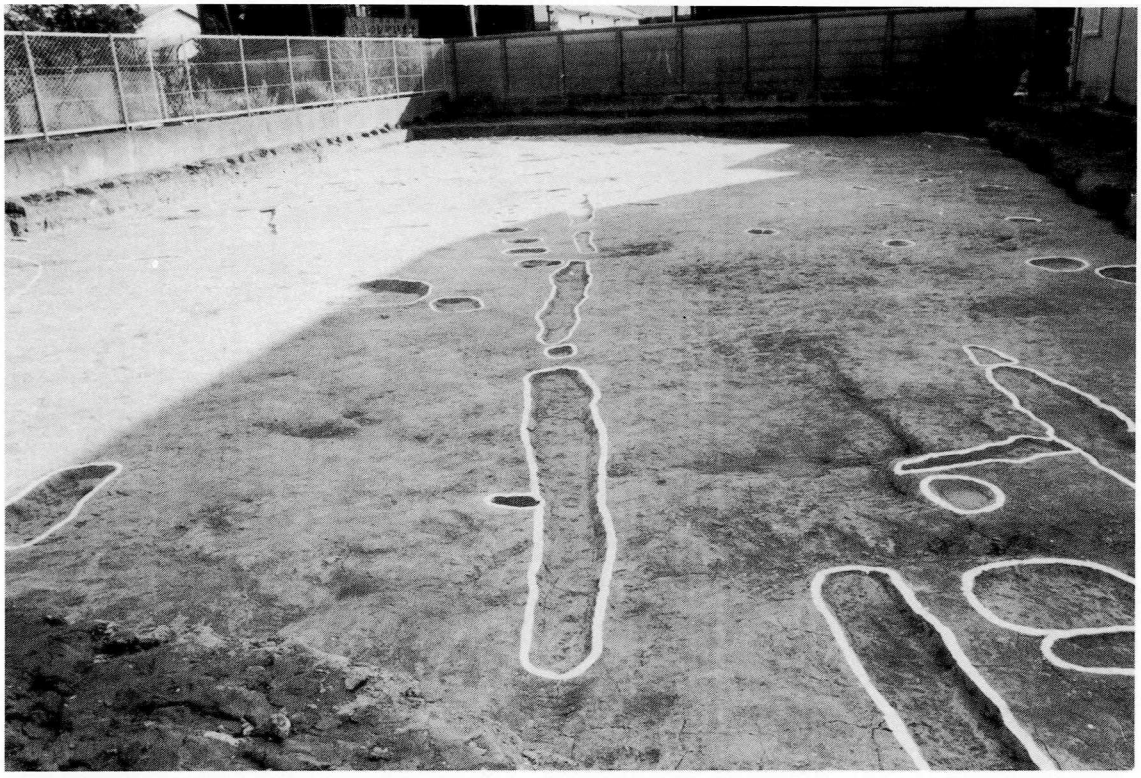
図版2　沢城跡



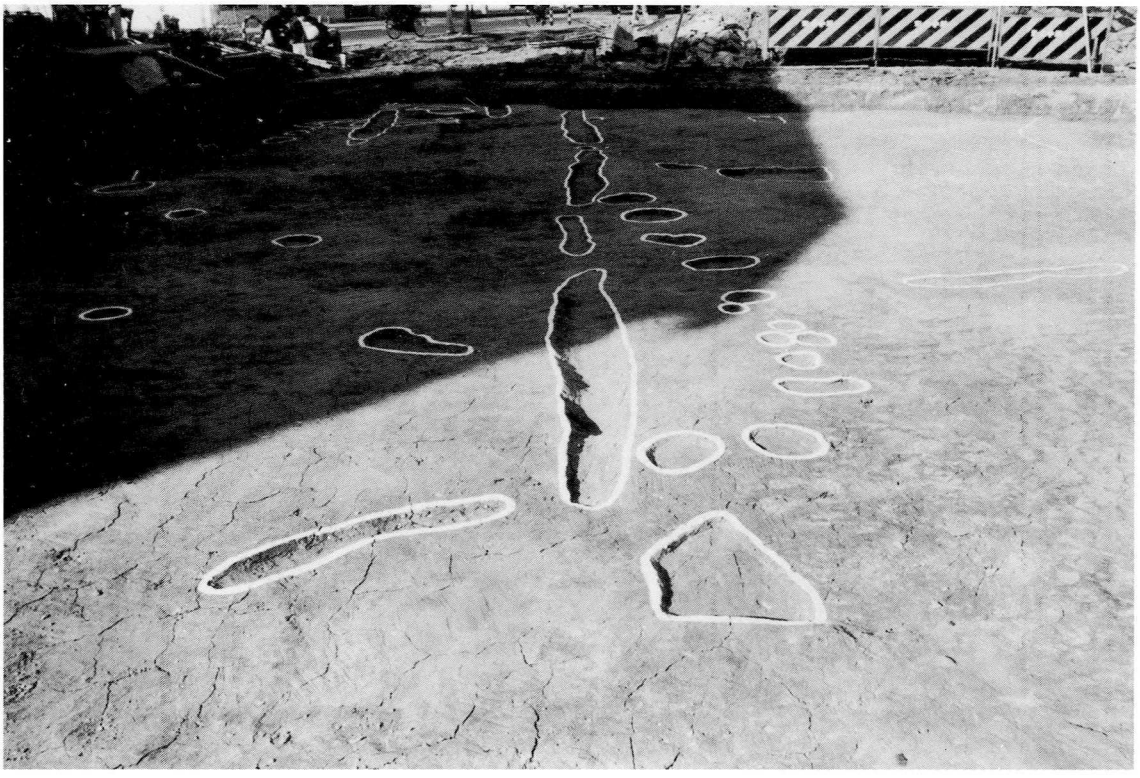
1．ＳＢ－１ 全景　　北東より

2．同　　上　　北より

図版3　沢城跡

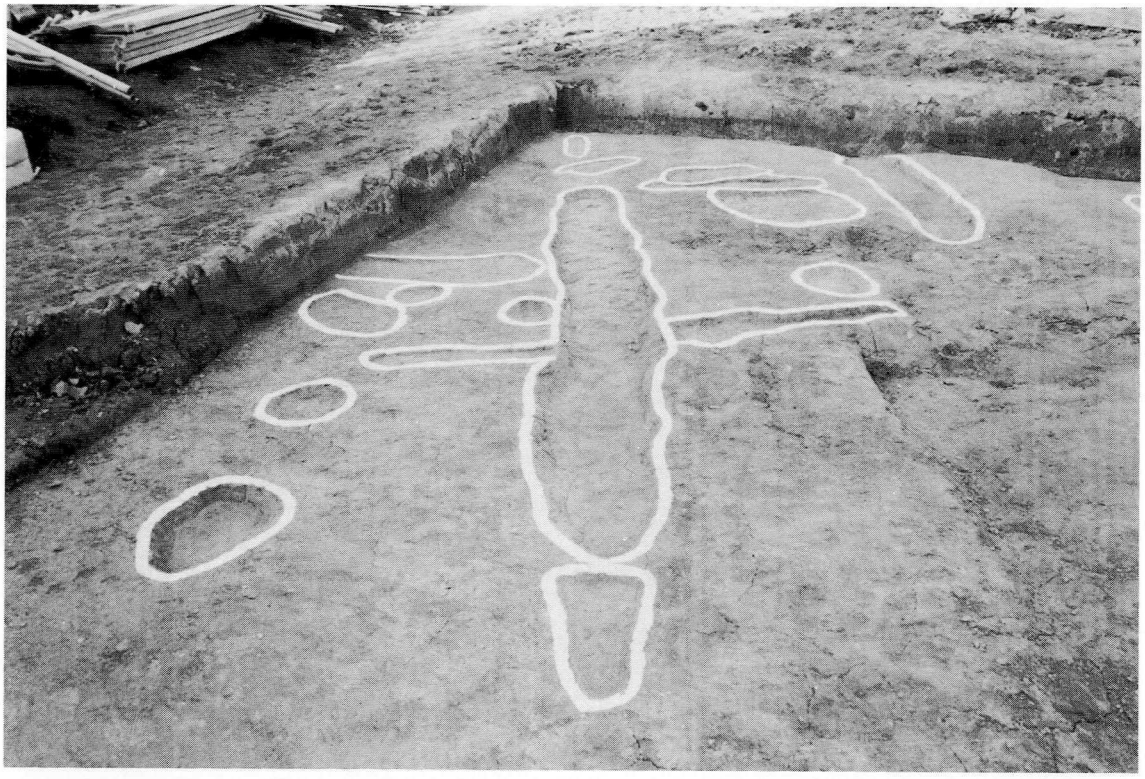


1．SD－1　　北より



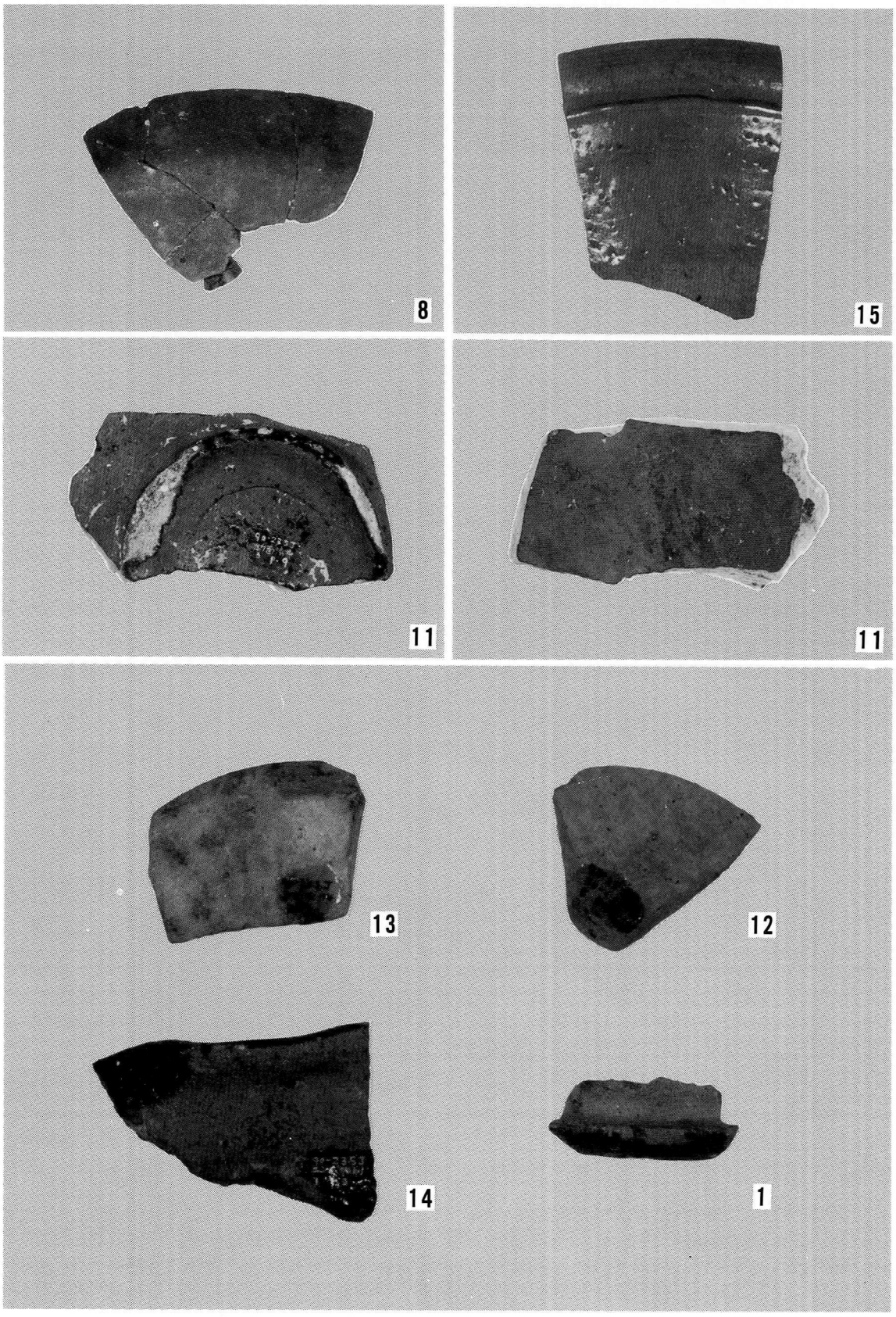
2．同　上　　南より

図版4　沢城跡



1．SD－2　　南より

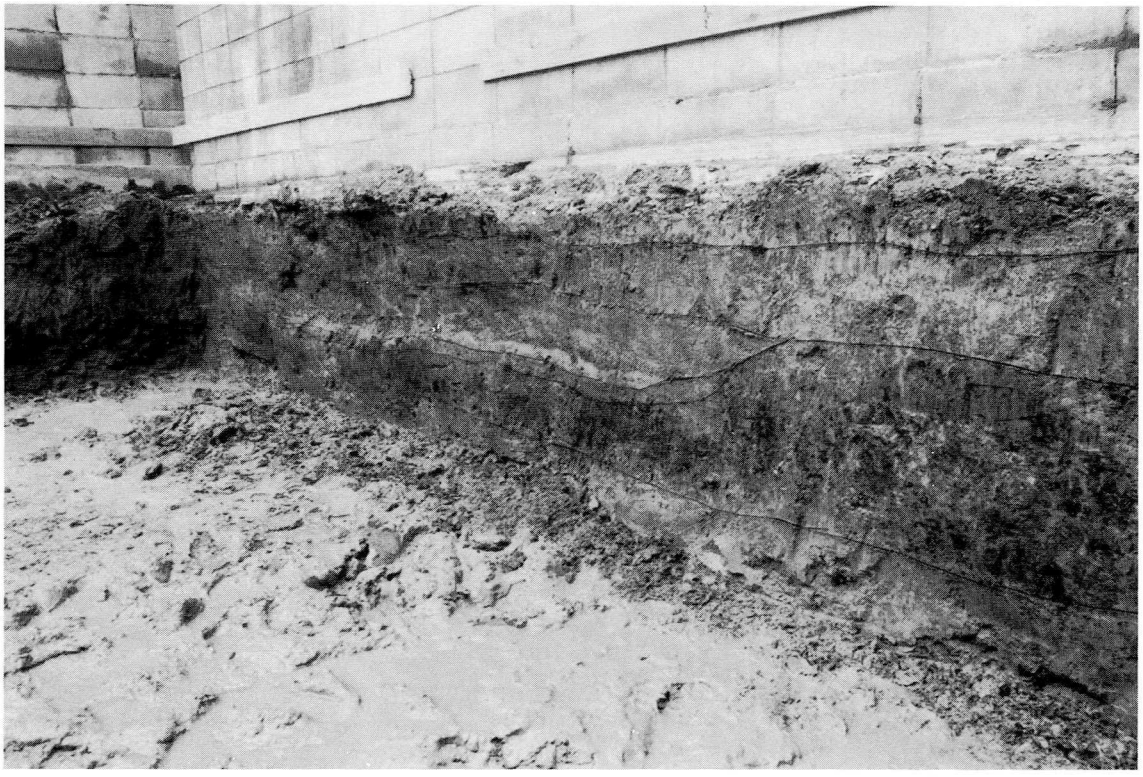
2．同　上　　東より



ＳＤ－１(12)、ＳＤ－５(13)、第３層(８、11、15)出土遺物

図版6　土生遺跡

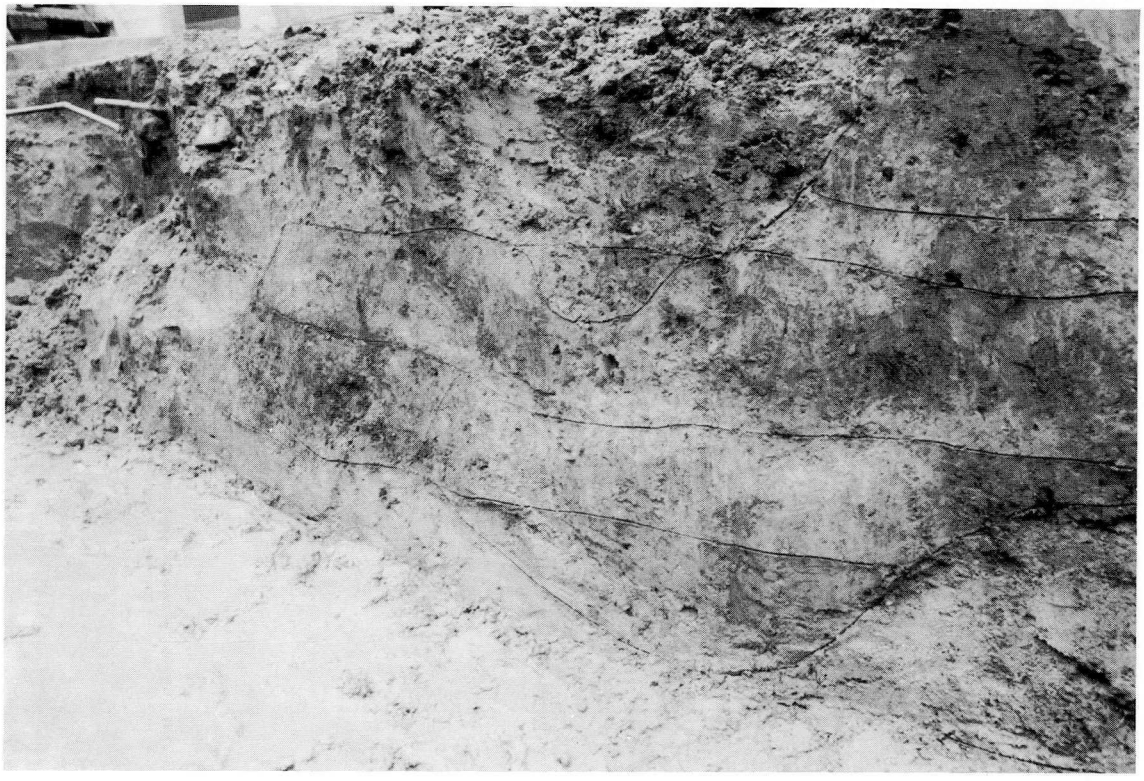
1．調査区全景　　西より



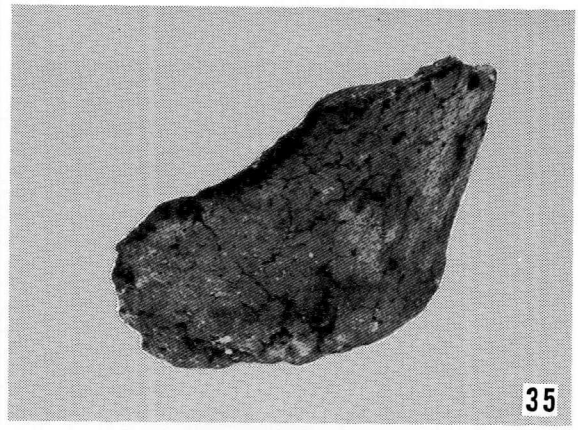
2．土層断面　　南より

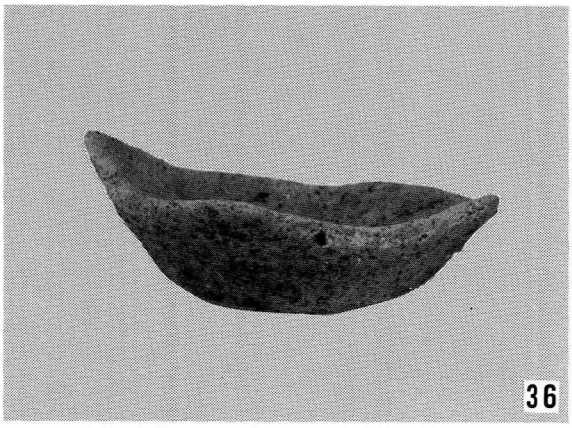
図版7　土生遺跡

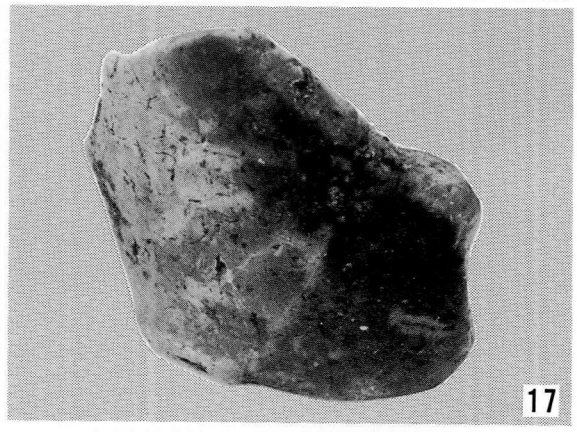
1．土層断面　　北より

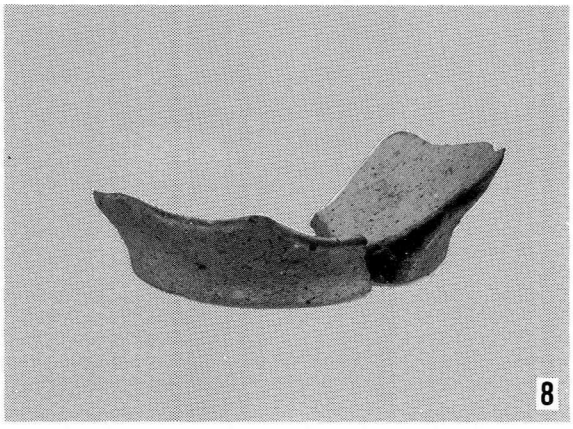


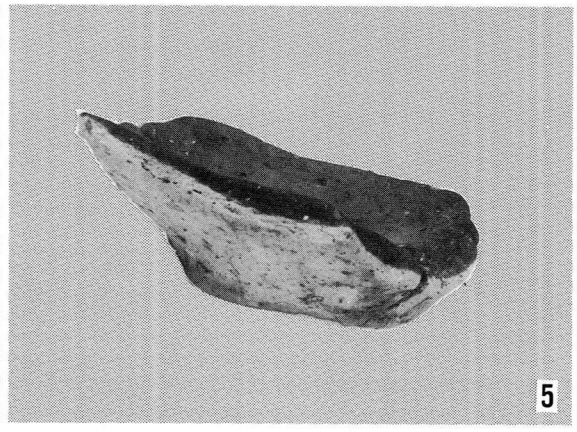
2．溝土層断面　　南より

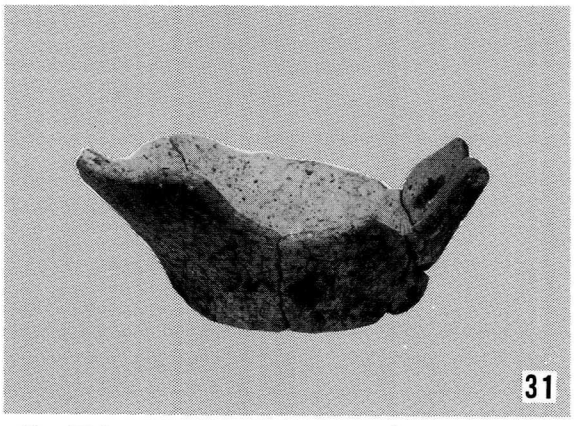


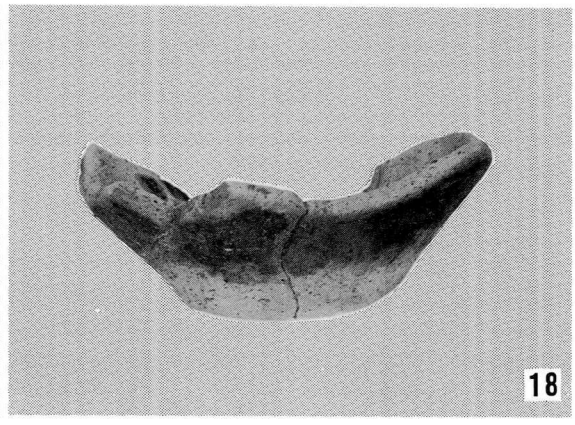




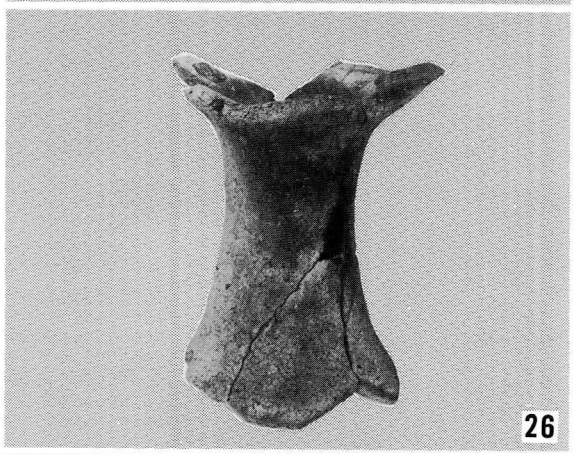


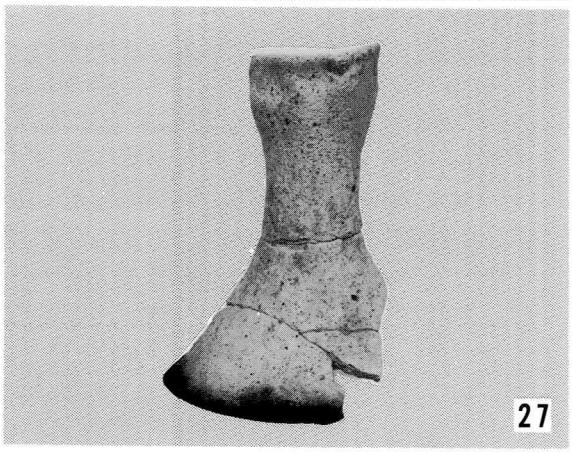


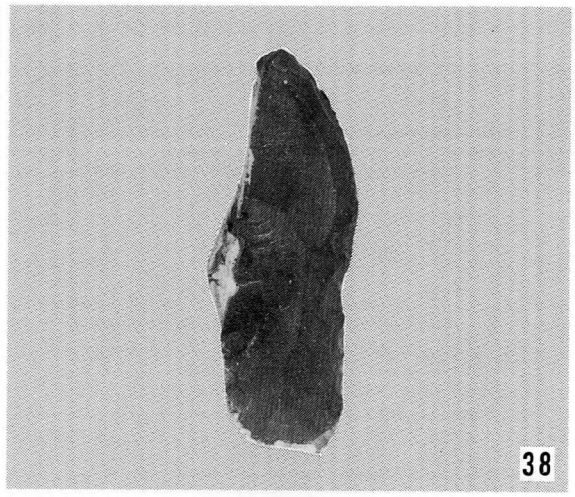


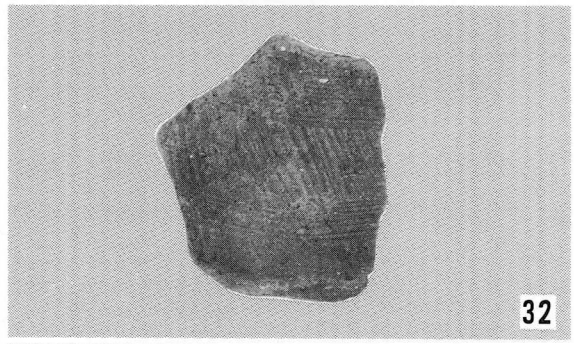


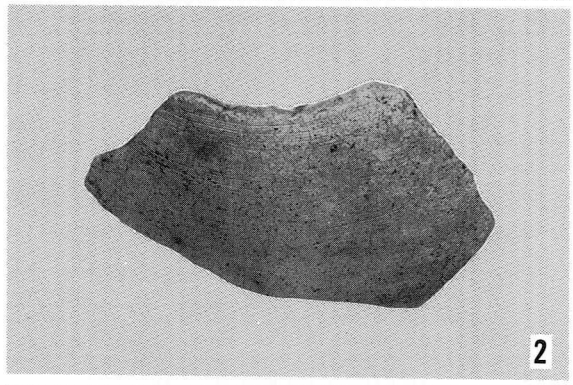
第3層(5、8、11、17、18、31、35、36)出土遺物

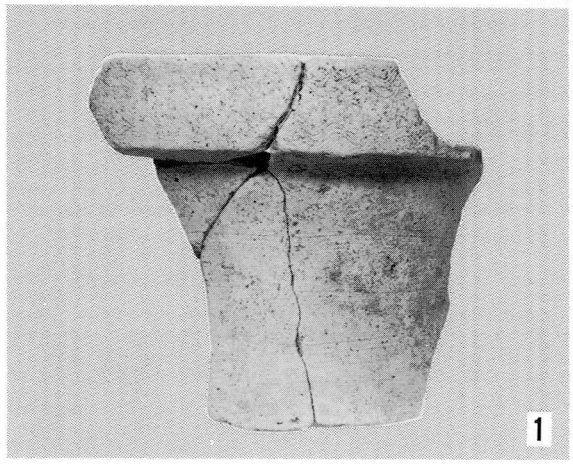












第3層(1、2、24～27、32、38)出土遺物

貝塚市埋蔵文化財調査報告第24集
貝塚市遺跡群発掘調査概要XIV

発　行　日　平成４年３月31日
編集・発行　貝塚市教育委員会
大阪府貝塚市畠中１－17－１
印　　刷　㈲山村印刷所
貝塚市近木 1483 － 8